

2009年植物科学シンポジウム
「ひき出そう植物科学の潜在力：日本発GM植物実現を目指して」
2009年12月1日（火）午前10時～午後5時半
東京品川コクヨホール
主催：大学植物科学研究者ネットワーク
（独）理化学研究所植物科学研究センター
（独）農業生物資源研究所

基本的考え方：医学や工学等の分野では、基礎研究とその成果を実際の現場で利用する応用科学の融合が、それらの分野発展の牽引車となっています。一方、植物科学も理学（基礎研究）から農学（応用研究）まで多岐に亘る領域をカバーしていますが、これまでこれらの二つの分野が有機的に連携し成果につなげる取り組みは必ずしも多くなかったと思われます。その結果、研究としてのゲノム育種やGMO育種研究が進展しそれらの成果が出ているにもかかわらず、実際の農業の現場ではその恩恵に浴することができない状況が生まれており、我が国の総合科学としての植物バイオテクノロジー研究のあり方が問われています。植物の生理現象が分子レベルで理解でき、その理解に基づき育種がデザインできる時代を迎えて、大学や独法を問わず我が国の植物科学研究者は、分子育種実現へ向けてその具体的な戦略も含めて、現実的かつ真剣な議論を行う時期にきています。そこで今年の植物科学シンポジウムでは、分子生物学から圃場での生産科学に亘る各専門分野、さらにはその産業化研究の現状と私たちの今後の植物バイオテクノロジー研究への関わり方について議論したいと思います。企画者、講師、会場が、日本に植物バイオテクノロジー研究成果実現に向けた大きな息吹を共有できるシンポジウムにしたいと思います。

1. 日本の植物科学研究最前線に見る研究の新しい潮流
2. 最先端研究を植物育種にどのように利用するか（3つの事例紹介）
3. 植物科学研究が急展開する中で、日本の植物科学各分野が社会的課題にどのように関わってきたか、関わっていくのか、現状と将来展望。とくにGM作物を根付かせる研究階層別のHOW？ これまでの狙いと現実のギャップの克服方法。理想的な実施方法とは？などを議論します。

2009年植物科学シンポジウム大学案
「ひき出そう植物科学の潜在力：日本発GM植物実現を目指して」
2009年12月1日（火）コクヨホール

10：00－10：10 開会の辞

日本の植物科学研究最前線に見る研究の新しい潮流

異分野融合による研究の新展開

10：10－10：50

「ジベレリン受容体によるジベレリン誘導誘導性DELLA認識」

箱嶋敏雄 奈良先端科学技術大学院大学 教授

最先端研究を植物育種にどのように利用するか（3つの事例紹介）

ケミカルバイオロジーと育種

10：50－11：30

「野生植物から発見ストリゴラクトン：分枝を制御する新植物ホルモン」

山口信二郎（独）理化学研究所植物科学センター チームリーダー

次世代GMO育種

11：30－12：10

「グルタチオン農業を目指して」

小川健一 岡山県生物科学総合研究所 研究員

12：10－12：50

「作物を用いた医薬品生産」

高岩文雄（独）農業生物資源研究所

(12：50－14：00 昼食)

14：00－14：40

「最先端植物科学と作物学の融合」

大杉 立 東京大学教授

日本の明日を切り拓く植物科学研究の方向

14：40－15：10

「問題提起：日本の植物科学研究、基礎から圃場まで」

松岡 信 名古屋大学 教授

15 : 10—15 : 40

「日本の植物科学基礎研究、この20年」

福田 裕穂 東京大学 教授

15 : 40—16 : 10

「科学技術研究における基盤研究の位置づけ」

柴田 大輔 かずさDNA研究所 室長

16 : 10—17 : 30

総合討論（司会は佐藤文彦京大教授）

話題提供

「植物科学研究の新たな展開」

篠崎一雄 理化学研究所植物科学センター長